児童文学作品のアニメ化が、もたらしたものは？

野上　暁

アニメの誕生と最初の児童文学アニメ

アニメーションの歴史は映画より古い。一八九五年一二月二八日、リュミエール兄弟によってパリのグラン・カフェでスクリーンに動く写真を投影するシネマトグラフが公開され、映画が誕生したと言われているが、絵を動かしてみるアニメの原型は、それ以前からあった。スリットを入れた円盤を回転させ、少しずつ動きを変化させた絵を、スリット越しに見ると絵が動いて見えるストロボ・スコープなどである。

江戸時代の日本でも、一九世紀の初めに幻灯機が渡来してくると、それをまねた木製の幻灯機を何台も使って投影する、「写し絵」とか「錦影絵」と呼ばれた寄席の演目が人気を呼んだ。ガラスに描いた種版の切り替えで、キャラクターの仕草や表情を微妙に動かし、何人かがそれぞれ持つ投影装置の移動によって、キャラクターを自在に動かしてみせたのだ。「勧進帳」や「小栗判官」「四谷怪談」など、歌舞伎や説教節の人気物語が映し出されて喝采を受けたという。まさにアニメの源流というべきものだが、これが世界最古のアニメ実演映像だとも言われている。

映画が誕生すると、アニメーション映画もそれを追って間もなく登場する。当時はアニメなどと言う言葉はなく、一般には漫画映画と呼ばれていたが、日本では、一九一七（大正六）年一月公開の下川凹天作「芋川椋三　玄関番の巻」が国産アニメの第一号とされている。同年五月には北山清太郎の「猿蟹合戦」、六月には幸内純一の「塙凹内名刀の巻」が公開され、この三人が日本のアニメの創始者たちである。しかし、それより一〇年ほど前に制作されたアニメが、京都で発見されたというから、すでに明治期からアニメは作られていたのだ。

昭和に入ると、『少年倶楽部』に連載されて大ヒットした「のらくろ」などがたびたびアニメ化されて人気を呼んだ。そして一九四三年、現在でも高い評価を得ている政岡